

銚子生まれ。幼少時代の思い出

大正7年生まれ、今年10月が来て94歳になります。生まれは銚子。今は銚子市になっておりますけど、その頃は、千葉県海上郡船木村三門といつてね。利根川周辺の農村地帯に住んでおりました。

私は農村に生まれましたけどもね、農村の育ち方じゃなくて。暮らしぶりは街の育ちに近かったかな、食べ物やなんかも豊富で、何も私たちは心配がなかったんですよ。

海までは三里くらいでね、海に行くことはめつたになかったですけど、利根川にはよく遊びでしじみを探りに行きました。利根川までは歩いて20分くらい。海水浴なんかはほとんど行かなくて、自分の家の前の用水路で泳いでましたよ。

昔はトイレも釜戸も外にありましたね。夜中にトイレへ行くときは、怖くてね。そんな時は親を起こして行きました。お風呂場とトイレは別棟で。お風呂は木の桶で、薪でお湯を沸かしました。薪っていうのは、みんな自分自分の家とつてくるんです。みんな山をもつてるから。秋になると、松の枝を取ったり草を刈ったりして、それを釜戸で燃やすために貯えるんですよ。お風呂には毎日入ってましたけど、水汲むのが大変だから3日くらい同じ湯に入ったんですよ。うちは裏に用水路があつたんですけど、それは山から来た水なもんでして、きれいな水だから私の村はそれを飲んでたんです。天秤で汲んでね。私たちが小学校5年くらいになると親に「今日は風呂取つとけ」つて言われて汲んでいました。天秤で担ぐんだけど重くて、お風呂場に来る

までに半分はこぼれちゃうんです。学校から帰つたら「水汲んどけ、ごはんだけは炊いておけ」つて言われました。釜戸で火を焚くには、秋のうちに山の松葉が枯れて下に落ちますでしよ、あれを熊手で掃いて貯えてあつたんです。

暖房は囲炉裏に大きな木、根っこは日持ちが良いからつて、ああいうのを割つたやつを燃やして暖をとつてました。囲炉裏だけだったから、寒いことには寒かつたでしょう。今は冬に氷がはつてるのをあまり見ないですけど、私たちが小学生の頃は、学校へ行く道中はずつと田んぼがありますから、わきに氷がいつぱいはつてましたよ。火鉢もあつたけど、それはお客さんが来たときだけしか出さなかつた。お客さんが来ると火鉢を出して、そこに炭を入れて。

電気が初めて付いたのは私が5歳のとき。そのときは嬉しくて嬉しくて、村中駆け回りましたよ。「うちは電気付いたぞ！電気付いたぞ！」つて。なんか明るいなって思いました。その前はランプだったでしょ。夕方になると、子どもたちは手が小さいからつてランプ掃除をやらされるんです。姉がそれやるんだけど、「お前の手は小さいから手伝え」つて言われましたね。ランプ掃除が夕方の仕事でしたよ。毎日やらないとススで真っ黒になつちゃうから。電気が来てからは勉強するのに楽になりました。

子どものころの遊び

近所には同級生が3人いてね。弟の勇は4つ違いだったけど、母が家にいたから子守りはあんまりしなかつた。私をめぐれば遊び

してくれましたよ。毎日外で遊んでいて、元気がよかったですよ。用水路でも遊んだりしました。水路に落ちて私はしょっちゅう溺れかけたんです。そんなに深い川じゃないけど、年中人通りがあるから助けてもらったね。

私はおてんばでしたから、よく陣取りをして遊んでいました。陣取りっていうのはですね、じゃんけんで人数を決めて陣を守るんです。向こう側とこっち側に一本の木がありません。向こう側と決めて、誰にも捕らわれないで相手方の木を触れたら勝ったことになるとです。私が取りに行くときと敵が追っかけてくるから、それを逃げまくって陣を取ろうとして、そんな遊びでしたね。男の子も女の子も一緒に遊んでましたよ。他には、男の子はメンコ、女の子は毬つきやお手玉、おはじきなどをして遊んでいましたね。小学校1年生の2学期頃から男女別のクラスになったんだけど、でも遊ぶときはみんな一緒にしたよ。

陣取りやなんかは村の水神様のある八千代の境内でみんな遊ぶんですよ。今はもう、お宮とかなんかはなくてね、鳥居だけが残っています。

大好きな畑仕事

家では、お米や麦、菜種も作って売ってましたよ。銚子の辺りは気候が温暖なんで、二毛作といって田に菜種を作ったりしたんです。

農家の仕事は、母が雑貨商をしながら手伝っていました。田舎の方だからそんなに忙しいってわけでもなかったから。私も畑仕事の手伝いはしていましたよ。大好きでしたね。

田植えから他の草取りまで一通り手伝いました。私は学校を高等科まで行っていましたから、その間はずっと農業の手伝いをしていましたよ。

春になれば、麦ぎくつて私ら言うんですけど、風とかを防ぐために土寄せをしました。1番ぎくつていうのは、鋤で土を1回きくつたのをかけること。それが終わりますと、2番ぎく、3番ぎくつてね、麦がだんだん大きくなるまで3回きくつては土をかけます。麦の根元がしっかりするように、ぎつくぎつくと寄せるんです。

それで麦踏つてやるでしょ。霜柱で土が浮いちやうから麦の根っこがしっかりするようにと、抑えてやるんです。麦つて麦踏の頃は、地面にべったりとくっついちゃってるんです、寒さで上へ伸びないで。それで土寄せをして土で壁を作って守ってあげるんです。子どもがやるのは大変なんですけれども、小学校5〜6年生くらいになってね、やりたくてしょうがなかったんですよ、そういうことを。親がやってるのを見て、手伝いをやらせてくれやらせてくれたって言っていました。

麦は脱穀機にかけて、もみ殻が付いたまま売ります。麦粉はすいとんとかに使ってました。おまんじゅうつくったり、何でも出来ますよ。柏餅もお母さんが作ってましたね。それで、柏の葉がないから桜の葉とかああいうので作るんですよ。みんなうちで作りましたねえ。

小学校のお弁当

小学校は給食がなかったからお弁当でした。小学校1〜2年くらいまでは、午前中で

学校が終わったからいらなかったけどね。うちのお母さんは銚子の出身ですから、魚が大好きな人でして、イワシからサンマまでころつと煮付けて、甘辛煮にしてお弁当に入れてくれました。卵なんかつてのは病気でもしなきゃ食べられなかったですよ。鶏は飼ってたからたまに食べられたんですけど、卵を買いに来る人がいたから、お母さんのお小遣いとして売っていったんですよ。

あとは、お新香を2切れ3切れ入れたりして。もちろん、お新香なんかも自分の家で漬けていましたよ。大根を干したり運んだりするのは手伝いましたけど、漬け込むのはお母さんがやりました。ぬかみそ、たくあん、梅干しとかを作っていました。梅干しは必ずお弁当に入れてありましたね。

お弁当に入れるお魚は売りに来てたんで。銚子に船が入ると、自転車でイワシやサンマなんか、いろんなものを木箱に3つ4つ積んで。「イワシよ、イワシよ」っていう売り声で、男の人が自転車で売りに来ました。その声が聴こえると、「イワシ売りが来たね。ああ、船が上がったんだね。」と言っていました。イワシやサンマ、アジが多かったけど、めずらしいのはエイ。おいしいんですよ、甘辛く煮ると冬は煮こごりになってね。うちのお母さんはそれが好きでしたからね、丸一匹買って、切って煮たりなんかしていました。

当時は冷蔵庫がなかったから、煮るか酢にするか。酢漬けは保存食になるでしょ、だから活きのいいときにすぐ骨を抜いて皮をむいて、甕にいつぱいつけておくんです。酢にしておけば長持ちするしね。手伝いはあんまりしなかったですけど見てましたよ。それで今

はね、自分でたまにイワシのいいのがあると買って酢にしますね。

小学校の思い出

遠足は3〜4年生までは、香取鹿島。そして、5〜6年生になると銚子の灯台に行きました。なによりの楽しみでしたね、その頃は家族で旅行なんてしませんでしたから。遠足とか学芸会は村を挙げての行事でしたよ。私は劇が好きでね。舌切り雀で雀役をやりましたよ、体が小さかったからね。学芸会や運動会になると村の人がみんな来て場所を取ってね、大騒ぎでしたよ。

おてんばだったから運動会はお手の物でしたよ。50メートル走とか。その頃の私たちの格好は、下は赤いおこしで、上は赤いさらしをつけた袖襦袢っていうのを紐で絞めて、タスキをかけて走りましたよ。だって、その頃はまだ私たちはズロースなんてのは履かなかったから。ズロースを初めて買ったのは、小学校の4年生。そのとき初めてそういうものを見たね。もつと小さいときは着物。男の子もみんな着物で走り回ってましたよ。

自分の家から小学校へ行くのには1里ありました。毎日、下駄で。その下駄だって、1年でお盆と正月にしか買ってもらえないんですよ。だから大事でね、普段は裸足になって、下駄は腰につけて学校へ行きましたよ。下駄の歯が減っちゃったら大変だと思っ

ね。
尋常小学校に6年、高等小学校に2年、3年目に補習科つてのがありました。補習科も予科1年と本科2年つてのと3年あるんです。裁縫をやらなくちゃいけないから補習科

で2年くらいやるんですよ。それと、読み書き・そろばんができないと嫁にやれないって。勉強は大好きでした。学科は、読み書き・算術・修身・書き方がありました。5年生になったら理科・地理・歴史とか。数学なんかは平面幾何までやりました。私はなんでも大好きでしたから、成績はよかったですよ。人気者で可愛がられましたね、「まっちゃん、まっちゃん」って。兄が国鉄に勤めていたから、私のことを女学校に出そうって言うってくれてたんだけどね。親は貧乏人が女学校なんか出たら人に笑われるって、だから女学校は出せないって高等科へ行っただんです。

学校卒業後

その頃は、娘は学校を卒業すると必ず1回は奉公へ出されるんですよ。行儀見習いの勉強するために、女の子は修行に出される時代だったんです。私は子どもの頃すごく霜焼けができてね、女中やなんかに行くとき霜焼けが痛いそうだから何か他のことないかって言われて。でも、そうかといって、そのころは女の子が働く勤め先がそうはないんです。

私は兄がやっている製本がむしろそうだと思います。やってみたいなと思っていました。高等科を卒業して、ちょうど私が18歳でしようかね、兄が東京で製本の仕事をしておりましたから、私も東京へ出たんですよ。お兄さんのところで働こうって思ってた。でも、お兄さんに言ったら、やっぱり身内を使ってるって甘えがあるから、他人のところへ行っただけで仕事を覚えろって。それで、兄が世話してくれて他人の会社へ行っただけで働きました。今でいえばバイトですか、あの頃は1時間6銭くらいで

働きました。

そこで、2年間修業したんですけど、1時間6銭だのなんだのって、こんな安い金で使われてるとばかばかしいって思いました。なんとか自分で独立したいなって思ってた。それで独立したんですよ。女の子5〜6人使ってた製本の下請けをやったんです。小さな会社ですけどね。18歳か19歳のときにはもう人を使ってたんですよ。製本となると男が必要になるけど下請けは女で十分。あのころ、神田の辺は製本の折りが多くて。だから折り専門の業者が多くいたんですよ。山海堂出版ってありましたよね。その山海堂さんの製本の下請けでしたから、仕事は製本の中でも上流の製本なんですよね。

なんていいいますかね、私は人の仕事を見ているのは好きなんです。大工さんがやってるのを見ても自分でもやってみたいって思ってた。左官屋を見てもやってみたいって思ってた。職人が好きなんですよね。

(聞き書き よいちあゆみ)